

わが研究生活40年をかえりみて

片 桐 誠 士

40年にわたる研究生活の途上で、私は生涯の師として二人の先生に出会います。すでに故人となられた最初の恩師内海庫一郎先生との出会いは、その人柄と講義に魅せられてゼミを選んだことから始まります。

大学院時代、先生から最初に与えられたのは、L. ロビンス「経済科学の性質と意義」(1932年)でした。周知の如く、ロビンスはハイエクとともにイギリスにおける一般均衡論者として、ケンブリッジ学派に対抗するロンドン学派の総師ですが、私の修士論文は、このロビンスの経済理論と景気理論—ハーバラー、ハイエク流の貨幣的景気理論との関連—をとりあげたものです。ロビンスの著作の難解さに苦労したことを思い出します。

私は統計学の研究室にいましたから、先生からP. フラスケンパーの「統計的平均値」を指示され勉強しました。フラスケンパーは、ドイツ後期社会統計学派の一代表者であります。20世紀に入りますとドイツ社会統計学派の統計学は、その学問的性格において大きな変貌を遂げます。G. V. マイヤーの「実体科学としての統計学は凋落し、代って統計調査法が「一般統計方法論」として統計学の主要な研究対象になり(ジージェック)、さらにフラスケンパーでは、統計調査論に対して数理統計学の条件づき受容を内容とする統計利用論の比重が増大するようになります。今にして思えば、先生がフラスケンパーの研究を指示されたのは、ドイツ社会統計学派の統計学史的研究を奨められたものと思われまゝ。しかし当時の私は、「利潤率低下法則」の問題や「窮乏化論争」に強い関心をもち先生の意図をなおざりにしました。私の落度という他ありま

せん。そんな訳で、この後私は、R. ロスドルスキー論文を中心に利潤率法則の論証について、さらにG. M. ギルマン「利潤率の低下」をめぐる新たな論争について書くことになるわけです。ちなみに、大学院を出る折、某私大から経済原論の話がありました。しかし私は信義上、その2日前に決っていた道立総合経済研究所に行くことにしました。

総研時代、はからずも私の研究テーマは大きく変わることになります。総研は調査研究機関ですので、何らかの調査をしなければなりません。その上これまでどなたも取組まなかった商業・流通分野を担当することになったからです。調査や統計利用の点では、これまでの統計学の勉強が大いに役立ったのですが、調査データが問題でした。当時、商業の分野では「商業統計調査」ぐらいしか無い上に、このデータ精度が極端に悪いものですから調査研究には大変な苦労をいたしました。結局、個人の力では必要な調査は出来ませんので、北海道庁の組織力を動員して調査データの獲得につとめました。6年間の総研時代、まず最初に、消費購買調査、商圈調査にもとづく商圈研究、第2に卸売甲調査8,000店の独自集計による段階別流通経路機能の研究、そして第3に百数十万枚におよぶ個票集計による域際取引データに基いて、移出入交易と需給構造の解明を手がけております。

昭和43年4月、今は亡き伊藤森右衛門先生（元学長）のおさそいで小樽商大に来たのですが、当時大学は紛争の真中にあり、私は赴任するなり紛争の真只中にとびこんだも同然でした。ストライキ、バリケード封鎖そして団交の連続で研究どころではなかった日々が数年間続いたものでした。とくに私が短大主事（現部長）の時には、校舎の移転、取り壊し問題、そして学寮問題のために連日団交に忙殺され、完全に研究の中断を余儀なくされました。当時の私は、「大学の自治」「学問の自由」にかかわる問題として、強い危機意識をもって対応していたのですが、いまだに深い印象として心に残っています。

この間、昭和47年9月から半年、大阪市立大学商学部森下二次也先生のもとへ国内研究に行かせていただくことになり、大変楽しく有意義な研究の一時を過しました。大学院のゼミでは、ブライヤーの The Marketing Institution

を取りあげていました。私はこのゼミに参加し、石原武政研究助手（現大阪市大教授）をはじめ、大学院生の加藤義忠（現関西大学教授）、小西一彦（現神戸商大教授）、佐々由宇（現下関市立大学教授）、馬場雅昭（現阪南大学教授）の諸君等との研究的語らいを日常化していました。また日本商業学会関西部会に出させていただきます、さらに森下先生のご紹介で現代マーケティング研究会、流通経済研究会に入会し、荒川先生をはじめ数多くの関西の諸先生との研究交流の時を過ごさせていただきました。

半年間の国内研究はあっという間に過ぎましたが、この時から、森下先生は私にとって専攻分野での生涯の恩師となりました。

国内研究の折、「マーケティングと公共政策」について書いていますが、これを契機に、私の研究志向は、もっぱら商業・流通政策の研究に向います。戦前の社会政策的視点に立つ商業政策は、戦後の流通革命を契機に経済合理性を実現する流通政策に転換し、さらにそれが流通近代化からシステム化へと推移する。こうした我国における商業・流通政策の展開をふまえながら、さらに比較流通論的研究として欧米諸国の流通政策にまで、その研究領域を拡げるべく取り組んでいるところです。これまでフランスについては手がけてまいりましたが、少くともアメリカ、ドイツ、イギリス、イタリアあたりまでは広げたいと思っています。

そもそも私が商業・流通の研究に取り組んだのは、人より10年はおくれており、いわば専門分野の研究者としては奥手であります。奥手は奥手らしい道を歩む他ないのであります。

旅の塵はらひもあえぬ我ながら

また新たなる旅に立つ哉

河上肇のこの歌が今の私の心境であります。

研究・教育生活40年をかえりみますと、小樽商科大学の27年は、私の人生で最も長くいた職場であります。ただ長く定年まで勤めさせていただいたというだけで、これといってさしたる貢献もなかった私に、大学は名誉教授の称号を与えてくださったうえ、「商学討究」の記念号を出してくださるという。まこ

とに有難いことと感謝の言葉もありません。

小樽商科大学の益々の発展を祈念しつつ、「商学討究」の編集委員、本号執筆の諸先生はもとより、商大の教職員の皆様に心から御礼申し上げます。